

子どもの心身症や発達障害の治療について

子どもが大人の意向を気にせずに動き回ると多動症やADHDなど、またどうかすると心身症やチックまでが『子どもの高次機能障害』という障害かのように、簡単に子どもの脳の障害だという判断で向精神薬の服薬や経過観察で終わることが多くなりました。

それらに不安を覚えるときには、もう一度子どもの気持ちを緩やかにすることを考えてみます。

育児とは、時間の余裕と気持ちの余裕が必要とされることです。日本は核家族が戦後の急速な欧米化、電化生活という文明のたまものとして生まれ、核家族として一番必要な家族の会話を通じてのお互いの気持ちの理解がなく浸透してしまいました。

核家族に必要な二人、あるいはたった一人の大人が『子どもの言うことを聞き、子どもの気持ちをできるだけ正確につかむ』ことがないまま、つつい『子どもは大人の言うことを聞くべき』という封建制度を強いてしまいます。そうなることは、どうしてもやがて親子の中で『下剋上』を生んでしまいます。

また日本は、一般的な状態から外れたことを異端視します。子どもや育児が一般的な状態から外れていると批判されます。そんな世間の視線を気にすること、子どもをもののように『標準化』の方が子どもの気持ちを知るよりも優先されてしまいます。

時間と労力の節約としては、子どもが園や外から帰ってきた瞬間に浴槽にお湯を入れながら子どもとの入浴を始めてしまうと、あとになってテレビや遊びに乗じて座り込んでいる子どもからそれを引き離すことなく入浴を済ませることができます。また入浴そのものも元々は遊びにつなげられるものなので、せかしたり怒ったりしなければ楽しく満足もあり、あとは食事だけ…と子ども達を支配する必要も減り、家の中の雰囲気も穏やかになります。

時間と経済と労力の節約としては、『週一回しか買い物をしない、ないものはないですませる、たとえ安くてもそれを使い切ってからでないで補充を買わない』などがあります。『日々の買い物』という時間をできる限り節約することで子どもに向ける時間、ひいては優しく柔軟につきあう余裕が生まれると同時に、経済的にもかなり余裕が生まれるものです。

また合わせ調味料の材料を大きめの計量カップやペットボトルに材料を入れて、それを子どもに混ぜたり振ったりさせてやることに始まり、時間があるときに単に遊部でなく、簡単な包丁仕事などを気長く付き合せてやらせていくと、子どもはたくさんの危ない経験を大人と共にしながらあっという間に上手になり、しかも料理に興味を持って、何年もたった後には・・・たくらんだ通りの結果が生まれてきます。

そんな手の内を工夫してあれこれ考えてみることは、最初のうちには時間を取られても、その苦労と時間と汗と涙の結晶として心と時間の余裕が生まれ、親子関係、そして子ども

の人生を大きく変えてしまうものです。